



TITLE:

上海の紳商楊坊

AUTHOR(S):

外山, 軍治

CITATION:

外山, 軍治. 上海の紳商楊坊. 東洋史研究 1945, 9(4): 211-228

ISSUE DATE:

1945-11-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145833>

RIGHT:

上海の紳商楊坊

外山軍治

一

米國人ウオード (Frederick Townsend Ward・華爾) が、常勝軍 (Ever-Victorious Army) といふ名で知られてゐる部隊を組織し、それが上海附近に於ける太平軍即ち長髮賊の討伐に大に活躍したといふことは周知の事實である。而してウオードを後援して、彼に部隊を組織させたのは、上海道臺、即ち蘇松太道にして布政使を兼ねた吳煦と、上海の富紳楊坊とであつたことは、支那側記録のひとつと認める所である。一二の例を示せば、同治元年正月庚戌、江蘇巡撫薛煥の上奏に

華爾は美理駕部落の人。稱する所によれば、さきに本國に在つて武職に任ず。ついで官を辭して商業に従ふ。咸豐九年に於いて、弟華得とともに資

を携へ、滬に來りて貿易す。十年五月の間、松江を守りを失ふ。蘇松太道吳煦、兵を知る人を求む。記名道楊坊、力めて華爾の任すべきことをすむ。吳煦、その人を見るに甚だ樸誠。即ち官軍に隨同して松江を收復せしむ (籌辦夷務始末同治朝四) とあり、また馮桂芬の顯志堂集六副將華爾小傳によると

：國人これを殺さんと欲す。上海、まさに兵を治めんとす。候補道楊君坊その勇を愛し、これを家に匿し、上海道吳君煦を介して美領事に言ひ、免るゝを獲たり。こゝを以て吳君を徳とし、死を效さんことを願ふ。

といふ。而して李文忠公朋僚函稿一に載せた同治元年三月二十五日附、曾國藩に宛てた書翰中には「華爾は

もと吳曉帆(照の字)の私人なり」とまで云つてゐる。

ウオードの二人の後援者の内、吳照は、どちらかと云へば、蘇松太道即ち蘇州府、松江府、太倉州の二府一州の防衛に任すべき職掌柄から、ウオードの部隊組織に關係をもつたものゝ様であるが、楊坊の方は、ウオードが最初部隊を組織した咸豐十年の當時には、候補道(或は記名道)即ち道臺候補であるが、實官を有するものでない、吳照よりもさきにウオードを知つてこれを吳照に紹介したといふから、吳照に比べると、むしろ私的關係に於いてウオードを後援したものであると考へられる。従つて、ウオードの後援者としては、吳照よりも楊坊の方がより注目さるべき性格をもつてゐると思はれるのである。ところが、楊坊の傳記としては、同治上海縣志二三游寓傳、光緒鄞縣志四四楊坊傳等があるが、その記載は我々を満足せしむるものではない。本篇は、楊坊に關する斷片的な記載を拾つて、片鱗だけしかあらはさない楊坊なる人物の全貌をつかまんとする努力を示したものにほかならない。

二

楊坊がウオードを知るに至つた詳しい経緯は判らないが、彼がウオードといふ米國人に利用價值を見出した時期は、南京から江蘇、浙江の海岸地方への進出を企てた太平軍のために、常州・蘇州・松江・太倉等の諸府州が陥れられ、上海も何時その強襲をうけるかも知れないといふ危険な状態にあつて、上海在住人士の動搖その極に達した咸豐十年の上半期のことであることは疑ふ餘地もない。當時、清朝政府は英・佛との間の紛争がどういふ結末になるか判らなかつたから、到底上海の危険を未然に防ぐべき對策を講ずる餘裕はもたない。

英・佛も自國權益の存する上海の防禦には深く意を用ひ、上海の城市と租界とを如何なる攻撃よりも防禦すべし、と宣言はしたが、それよりさき、江蘇諸城の回復に援助を與へられたし、といふ江蘇巡撫徐有壬、兩江總督何桂清等の要請には應じなかつたので、上海を太平軍の攻撃から救ふには餘りにも消極的であるとの感を與へた。尤も、當時の國際關係に在つて、徐有壬、何桂清の英・佛に對する援助要請の企てが、咸豐帝を激怒せしめたのは無理からぬことであつて、従つ

て清朝政府の許すべき事柄でもなかつたのである。こゝに於いて、上海在住の官紳の間には、自力を以て上海を太平軍の攻撃から護り抜かうとする機運が自然にでき上つたのであるが、この機運を實際運動に導いたのが即ち楊坊であり、吳煦であつた様である。それにしても、この際中國人の私兵を養ふといふことはしないで、米人ウォードの利用を考へたのは楊坊の眼界の廣さを示すものにほかならない。楊坊はウォードの人物を見込んでこれを上海道臺吳煦に紹介し、こゝに最初の外人部隊組織が始まるといふ段取である。

さて、外國文獻によれば、ウォードを知つて彼に部隊を組織せしめた人として、上海の愛國商人組合長のタキー (Taki, Takee) とする銀行家の名が擧げられてゐる。そしてモース (H. B. Morse) は、タキーをタキー銀行の頭取ヤンチャタン (Yang Tze-tang) であると註記してゐる。そしてこのタキーが候補道楊坊その人であらう、とは、夙に矢野仁一博士が推定せられた所である(近代支那史(四〇六頁)この推定は正しい。モースの註記にタキー銀行の頭取だとする Yang Tze-tang の Yang は楊であり、Tze-tang は啓堂、或は憩棠^④。

或は憩棠^④といふ彼の字の音を寫したものである。而してタキー銀行のタキーは即ち泰記の音を寫したものであると、王韜の甕牖餘談二「白齊文論」の記事より察知することができる。外國人がウォードの庇護者として記してゐるタキーは、上海に於いてその商號を泰記と呼ぶ銀行の經營者候補道楊坊、字は憩堂^⑤、啓堂、憩棠^⑥その人であつたわけである。タキーといふのは、元來銀行の商號であつたのが、やがてそれを營む銀行家の稱呼ともなつたのである。この泰記銀行の所在地は、上海縣城東門外の永安街であつたこと、モースの歴史小説「In the Days of the Taipings」p. 12 に見えてゐる。なほモースがタキーをウォード軍に對する paymaster であり、愛國商人組合長であると云つてゐるのは (The International Relations of the Chinese Empire, Vol. II, p. 82) 楊坊が上海在住の紳商の意志を代表し、道臺吳煦の諒解の下ウォードの部隊組織に援助を與へ、而してその外人部隊に對する兵費の提供をひきうけたといふ事實を表現したものにほかならない。これについては後になつて説明することにして、しからは咸豐十年の當時、上海の防衛に一肌ぬいだ銀

行家楊坊とは一体どういふ人物であるか。先づその前身を調べてかゝる必要がある。

三

楊坊が浙江省の鄞縣に本貫を有することは同治上海縣志二・游寓傳の記載によつて明らかである。その人となりについては、同書同條に、「多術策」と云つてゐる。而して彼が上海といふ當時の支那人にとつて新しい活躍の舞臺に乘出したことを記して

賈上海。西人通市交易。不數年明習各國事。

と云ひ、光緒鄞縣志四四楊坊傳には

商於上海。與西人習。西人親禮之。

と見える。また李文忠公全書朋僚函稿二「上會相」同治元年九月二十九日によれば「楊坊能通夷語」とある。上海に出て外國人相手の商賣に従ひ、外國語、外國事情に通じ、外國人の間にも次第に顔が賣れたといふことが窺はれる。かくて彼は致富の機會を巧みに捉へて巨萬の富を獲たものゝ如く、このことについて、左文襄公全集恪奏稿初編九「請將已革道員勒追京米捐款再行捐輸賑米片」は

楊坊以市儈依附洋商致富。十數年間擁贖百萬。

と云ひ、李文忠公朋僚函稿一「致左季高中丞」には

楊君以通事奸商起家。致數百萬。

と云つて、その致富の經過を、あまりたちがよくないといつた様に表現してゐる。更に清史稿列傳二〇九殷兆鏞傳によると同治初年頃の上海官場の腐敗を指摘した中に、

新授糧儲道楊坊。由洋行擔水夫致富。

と云ふ。洋行の擔水夫といふのが文字通りに擔水夫を意味するかどうかは知らないが、とにかく彼が卑賤から身を起したものであることには違ひなく、前後の事情より察して、當時新しい出世の途であつた、買辦行為によつて、上海といふ貿易場に於いて富紳と云はれるまでに成り得たことが想像せられるのである。

楊坊がその存在を中央にまで知られるに至つたのは、咸豐四年、その前年から上海縣城を占領してゐた小刀會匪の討伐に、政府側を援けて功を著したことに由る。咸豐三年八月、突如上海縣城を占領した小刀會（七首會）は、清朝を仇敵とする秘密結社、天地會（三合會）の一分派である。會匪は、同年二月に南京を占

領した太平軍に對して援助を乞うて得られなかつたので、孤立無援のはずであるが、清朝官兵の討伐は一向に進捗しなかつた。それは綠營の腐敗によることもさることながら、それよりも外國が城の東北、外國商館の羅列せる洋涇濱^{ヤンギン}の安全をはかるを名として上海城北門に對する清國官兵の軍事行動を阻害し、城内の匪徒はこの北門を通じて外國商人から武器彈藥糧食の供給をうけたからである。かくて清朝側は會匪の平定をなし得ずして、咸豐四年十月に至つた。楊坊が顔を出すのはこの頃である。

即ち當時新たに江蘇巡撫になつた吉爾杭阿は、北門外河に沿うて牆を築くこと約五百餘丈、橋梁道路をひつくるめて堵截し、賊匪への補給を斷絶させよう、といふ計畫を立てた。ところが、該處は城垣に切近してゐるので、外國側の力を借りなければ實行できない。英・米はこれに對して好意を示さずむしろ妨害の態度にさへ出たが、當時租界の共同管理について英・米と利害を共にしない佛は、始終清朝側に立つてこの工事を援け、後には兵力まで行使して賊匪を伐ち、遂に咸豐五年四月、これが平定を見たのである。この築牆工

事が、賊匪に對する補給を斷ち、その死命を制するに役立つたことは否み得ないことであるが、この工事を立案し、工事の進捗に盡力した一人が楊坊であつたのである。

築牆工事立案の經過を説いて、籌辦夷務始末咸豐朝一〇咸豐四年十月乙丑吉爾杭阿の上奏に、八月の間、浙江巡撫黃宗漢が書信を以て、寧波に告暇回籍中の翰林院庶吉士張庭學は、洋涇濱に在つて洋行を開張してゐる候選同知楊坊ともより親誼あり、ともに商辦すべしと云つて來たので、嘉定縣知縣吳煦に飭委し、張庭學、楊坊と會同し、心を悉して籌度した結果、工事を立案することになつた、と云つてゐる。楊坊はこの時すでに、候選同知であり、洋涇濱に於いて洋行を開いてゐたのである。この候選同知、といふ官が捐納によつて得られたものであること想像に難くない。洋涇濱に在つて開張したといふ楊坊の洋行の名稱を示した記載は見當らない。楊坊の例の泰記銀行と別箇のものであるかどうかとも判らない。が、モースの "In the Days of the 'Taiping'" にすれば Yang Tze-tang は小刀會匪の上海城占領の當日、危險を避けて大東門外

の永安街に在つた泰記銀行から、その事務所をバリア・ロード即ち今の河南路に移したことを記してゐるから、咸豐四年の當時、洋涇濱に楊坊の開張した洋行といふのは、或はこの新しい泰記銀行を指すのかも知れない。

築牆工事の困難は、清朝官兵の軍事行動を阻害せんとする英・米官憲との磨擦を避け、租界の共同管理といふ點で英・米と利害を異にする佛を味方につけるといふ所に在つた。こゝに外國語をよくし、外國の事情に通じ、外國人の間に顔の賣れてゐる楊坊の手腕が必要であつたのである。殊に彼は洋涇濱に於いて洋行を開いてゐる。これは數年後のことであるが、咸豐十年二月、楊坊の營業振りに關する報告の中に、彼が、外國商館中の、怡和、廣隆、寶順、華記、公益、和記等と取引を有してゐたことが見えてゐるが（籌辦夷務始末咸豐朝四八咸豐十年二月辛丑欽差大臣兩江總督何桂清上奏）、この時もすでに右の六商館もしくはその中の一部分と取引してゐたものと考へられ、在上海外國商人の動靜にも通じてゐたも道理である。利害錯綜せる諸外國官憲の間に立つて築牆工事を進捗せしめたの

は専ら楊坊の働きであつたと考へられるのである。また、楊坊の參畫したのは、築牆工事だけではなくて、兵糧供給といふ重要な仕事にも與つたといふ記事を載せてゐるのは、光緒鄞縣志四四楊坊傳で、舊雨草堂集の墓志を引いて「蘇撫吉爾杭阿、知坊才。檄知軍情」と見えるが、この方面にも彼はその才能を發揮したものに違ひない。

かくて楊坊は、小刀會匪討伐工作に於ける功勞によつて候選同知より候補道となるを得たこと、同治上海縣志、光緒鄞縣志等の記す所であるが、しかし、彼が候補道となり得たのは、小刀會匪平定の功に酬ゐるものであるといふよりは、むしろ彼が捐納といふ、彼の擁する財力にものを云はせる行爲によつてこれをかち獲たものであることは、籌辦夷務始末咸豐朝一〇咸豐五年二月庚戌條に「捐納道楊坊」と見えることによつて察知せられる。

上述の如き活動によつて、在上海支那商人中にその力量を認められたと考へられる楊坊は、一方郷里である浙江をもその活躍の舞臺として特異な手腕を振つたものと見え、左文襄公全集恪靖奏稿初編九「請將已革

道員勒追京米捐款再行捐輸賑米片」によると、

(楊坊)従前在浙經手洋務。往往從中漁利。人所共知。即如咸豐六年。爲前浙江撫臣借用英商卑哩大輪船一隻。未及三月竟開銷洋銀七萬九千餘圓。名爲供應洋人。實則取扱私橐。其味良嗜利如此。

と、楊坊の惡辣な蓄財振りを指摘してゐる。楊坊はたゞの銀行家ではなかつたのである。かくて楊坊はその蓄積し得た財力と、外國商人の間に博し得た信望とによつて、在上海支那商人中に、押しも押されぬ地位を築いたと思はれるのである。ところが一方清朝政府は咸豐六年、廣東に於けるアロー號事件と、廣西省に於ける宣教師殺害事件とによつて英・佛との間に紛争を起し、それは一旦天津條約を結んで結末がついたのであるが、咸豐九年、條約批准交換のために派遣せられた英・佛の使臣を太沽に於いて砲撃したゝめに問題は再び惡化した。英・佛使臣殊に清朝側史料に、列國使臣中最も強悍を以て目せられるといふ英使臣ブルース(Bruce・普魯斯)は、大舉艦船を率ゐて北上せんとし、また欄漕停稅即ち清朝側の海運を妨害し、關稅をおさへんとした。こゝに於いて大に狼狽した清朝側は、事

を未然に防がんとするために、一策を案じた。それは、在上海英國商人が、上海市場の擾亂を恐れるが故に、必しも清朝との開戰を喜ばないのを察知し、彼等を通じて外國官憲を牽制せしめるといふことであつた。この策は咸豐九年六月以降、欽差大臣兩江總督何桂清によつて度々上奏せられてゐるが、この時すでに蘇松太道になつてゐる吳煦等がその衝に當つたのである。吳煦が先年小刀會匪討伐の際に嘉定縣の知縣であつて楊坊等とともに働いた人物であつたことを想起して頂きたい。そして、英商を清朝側の希望するが如くに行動せしめるには、彼等に信用のある華商を動かす必要がある。あまた華商もある中で白羽の矢を立てられた一人が楊坊であつた。籌辦夷務始末咸豐朝四八咸豐十年二月辛丑欽差大臣兩江總督何桂清の上奏に

查有老成殷實。與夷商素相契洽之華商徐昭珩、楊坊二人。堪以任使。當即密飭妥爲辦理。該二商因與夷商中之怡和・廣隆・寶順・華記・公益・和記等六字號。貿易來往。

と見えてゐる。

楊坊の名こそ出てゐないが、彼も當然一枚加つてゐ

ると考へられる華商の暗躍を傳へる記事は、籌辦夷務始末に習見する。そして彼等の暗躍は、たゞに英・佛軍の北上を阻止せんことを目的としたばかりではなく、和平解決への粘着力ある努力を示したことが右の記載の隨處に窺はれ、時局收拾の蔭の人として充分の腕を見せた模様である。英・佛との關係の紛糾したこの咸豐十年の上半期に、南京の太平軍は江蘇、浙江の野へ進出を開始し、江蘇では常州、無錫、蘇州と相ついで陥り、更に太倉、松江等が太平軍の手に歸して上海の地位は危險に瀕した。常州から上海に逃亡した兩江總督何桂清は、江蘇諸城の回復に英・佛軍の援助を借り、かくすることによつて政府の希望する英佛軍の北上阻止の實を得、併せて自己の棄城の罪を糊塗せんとしたこともある。何桂清の目論見が甘くゆかなかつたことはいふまでもない。英・佛の援助など以ての外だつた。しかし何桂清が咸豐帝の怒にふれて革職鞫問に處せられた後、薛煥が署理欽差大臣暫署兩江總督となり、また英はエルギン (Elgin・額爾金)、佛はグロ (Gros・葛羅) によつて代表せられる様になつてからも、楊坊等華商の働きに期待して英・佛軍の北上を阻

止するといふ方針はうけつがれた。籌辦夷務始末咸豐朝五三咸豐十年五月壬戌薛煥の上奏中に「今額爾、葛酋到滬。連日察其動靜。……聞數日內即欲北駛。華商楊坊等。勸其與臣見面。……」といひ、同日條今一つの薛煥の上奏中にも「臣連日與吳煦、藍蔚雯。並華商鹽運使銜候選道楊坊密商……」などとその活躍を傳へてゐるのである

四

以上論述した所によつて、咸豐十年上海が太平軍強襲の前にさらされた當時、楊坊がその財力に於いても政治的手腕に於いても自他共にゆるす上海支那商人中の代表者であつたこと、而して實際、その代表者として活動してゐたこと、更にまた彼の有する政治的手腕なるものが、上海といふ國際市場に於いて外國勢力を或は向ふにまはし或はこれを抱きこむといつた様な、他人の企及し得ざる底のものであつたことが一應明らかにせられたことと思ふ。太平軍の攻撃より上海を衛るには、清朝政府もとより倚賴するに足らず、外國側の態度も餘りに消極的なを知つた楊坊が、上海官紳

の自力を以て防衛の策を講ずべきことを決意し、上海道臺吳煦の諒解の下、米國人ウオードをして外人部隊を編成せしめたことは前述の如くであるが、かゝる行動は彼の閱歷より見てさもあるべきことと考へられる。吳煦と楊坊とは、實に小刀會匪討伐の頃からの好伴侶であつたのである。

ウオードは1831年アメリカ マサチューセッツ州サレムの舊家に生れ、初め West Point (士官學校) に入らうとして失敗したので、多くのサレムの少年がする様に、十五歳の時に海へ乗り出して世界の港を巡り、1851年サンフランシスコ上海間を通ふ貨物船の一等運轉士となり、1857年には支那の沿岸を航行する沿海通ひの蒸汽船の運轉士になつた。1859年(咸豐九年)秋にはいよいよ上海へやつて來て、揚子江通ひの蒸汽船の運轉士に雇はれ、後間もなく官軍の武裝汽船「孔夫子」號の士官になつたと云ふ (Morse; The International Relations of the Chinese, Vol. II, p. p. 69, 70) 前引、籌辦夷務始末同治朝四同治元年正月庚戌條に、華爾の言によれば、さきに本國に在つて武職に任じ、ついで官を辭して商業に従つた。と

あるが、これは事實ではない様である。また彼が弟の華得なるものと共に上海に來たといふのも、これを傍證する記事を見ない。要するに、生れつきの冒險家で、支那の内亂を機として、官軍か叛軍か、その何れかに加擔して華々しく活動し、富貴を獲んとする人物であつたらしいが、彼がその抱懷せる鬱勃たる冒險精神を發揮する機會に恵まれたのは、楊坊の知遇を得たことによるのである。

ウオードは、松江を太平軍の手から奪取した曉には三萬兩の謝禮をもらふ約束で、兵員の募集にとりかゝつた。その結果、海員を主とした百人そこゝの外人部隊を組織した。その當時上海には、外國海軍や商船隊から逃亡したものや賊首せられたものが集つてゐて、あらゆる冒險を引受けようとしてゐたのである。 (Morse, *ibid.*, Vol. II, p. 70. Note, 23, 24) ウオードはそれらの連中を率ゐて松江城内の太平軍を攻撃して撃退せられた。彼は上海に歸つてそれらの外人部隊を解散し、再び兵員の募集を行ひ、百名のマニラ人(フィリピン人)と、バージェヴィン (Burgvine・白齊文)・フォレスター (Forrester・法思爾德) と云ふ二

人の外國人副官を以て部隊を改編し、これを率ゐて再び松江府城を攻撃し、咸豐十年五月二十八日（七月十六日）^④太平軍を驅逐して松江占領に成功したのである。

モースによればその後二度青浦攻撃を企て、失敗し、

松江に本營をおき、部下の訓練に従事した。ウォードは松江奪回によつて果然上海の支那商人の間に信用を博したが、外國人からは掠奪者を以て目せられた。彼の行爲は嚴正中立を聲明したアメリカ官憲にとつても不都合であり、また、イギリス海軍當局にとつても、彼等の水夫が冒險趣味と掠奪致富の夢に眩惑されて脱走するので不都合であつた。そこで咸豐十一年夏、イギリス提督ホープ（Hope・何伯）に海員の脱走誘助を理由として捕縛せられ、アメリカ領事に訴へられた。

この時ウォードは支那の國籍を取得してゐることを證據立てたので無罪となつたが、英提督はこれを釋放せず、英旗艦に監禁した。そこでウォードは隙を見て泳いで脱出したのであるが、こゝに於いて彼はやむなく外人部隊を解散し、その代りに支那人部隊を組織し、これを外國人教官の手によつて教練し、支那兵として珍しい紀律ある軍隊に仕上げ、咸豐十一年末にはホー

プ提督は彼の松江の陣營を視察し、これを見て喜び、將來の援助を約するに至つたといふ。これが後に常勝軍と呼ばれるに至つたのである。（Morse; *ibid.* Vol. II, p. 70）

この間に太平軍の第一回上海攻撃が行はれた。咸豐十年七月、ウォードが外人部隊を率ゐて松江を奪回した後のことである。この攻撃は在上海の外國軍隊によつて撃退せられたが、その後、再び浙江方面に進出を企てた太平軍は咸豐十一年十一月浙江の省城杭州上海同様開港場たる寧波を陥れるに至つた。上海在住の官紳は、時に恃むべき官兵なく、外國の積極的な援助も得難い狀態に不安を感じざるを得なかつた。ウォードの率ゐる外人部隊が松江奪回によつて上海官紳の信用を博したことは事實であるが、それが上海官紳を堵に安んぜしむるに足りなかつたことは言を俟たない。

一方、清朝と英・佛との關係は、ゆきつくところまでゆきついた。英・佛軍の太沽、天津占領から北京進撃となり、咸豐帝の熱河蒙塵、英・佛軍の圓明園燒打等、清朝にとつて名譽ならざる事件が続いた後、咸豐十年十月、天津條約批准成立し、清朝と英・佛及び露

との間に北京條約が締結せられたのである。かくて、清朝と外國との關係は一新した。從來、太平軍の將來性に期待をかけ、同情的な立場をとつてゐた外國側も、太平軍の現狀にあき足らぬものを感じてゐたところへ、太平軍が外國權益の存する開港場を覘はんとするに至つたので、大に太平軍に對する同情を失つて來た。ところへ、上海の官紳は、安慶に於いて地歩を築いてゐた兩江總督曾國藩の許に兵力の分遣を請うたが派兵の事が早急に實現しないことを知るや、浙江在籍の官紳とともに、更に薛煥を動かし、同治帝に對し、髮賊討伐に英・佛の援助を受くべきことを奏請せしめ、帝も遂にこれを許し、政府をして正式に北京駐劄英・佛公使に援助方を要請せしめるに至つた。こゝに於いて英佛はこれに應じて正式に清朝側に立つて太平軍と戦ふことになつた。時に同治元年（1862年）正月。この間の経緯は別の機會に詳述するが、清朝はこゝに自國領内の上海の防備に關し、英・佛の援助を請はざるを得なくなつたわけである。また、上海の官紳は、英・佛官憲と商議の上、咸豐十一年十二月十四日、洋涇濱に會防公所（會防局）を立て、英・佛提督、領事

等と攻防の策を謀つたのであるが、これまた清朝と外國との關係の好轉を示してゐる。但し、楊坊は右の、曾國藩に對する派兵要求、外國の援助要請、會防局の設立の何れにも、顔出してゐない。裏面に於いては知らず、表面に於いてはである。

李鴻章が曾國藩の推輓をうけて江蘇の回復に任ずることとなり、淮軍を率ゐて上海に到著したのは同治元年三月、彼が薛煥に代つて署理江蘇巡撫になつたのは四月である。李鴻章の淮軍が活躍するに至るまでは、上海及びその近傍は、實に主として英・佛軍や、ウオード軍に任せられたわけである。咸豐十一年末より同治元年初にかけて太平軍が上海にせまり、再び松江を犯した時、ウオードは洋式教練を施した部下の兵を率ゐ、これを廣富林に防いで大破し、辰山、天馬鎮の賊壘を平げた。ついで英・佛軍と聯合して、上海に逼らんとした敵を撃退し、八月寧波に至り、慈谿の戦に重傷を負うて戦死するまで上海近傍の掃蕩に功を著した顛末はこゝに詳述しない。ウオードの部隊が中央に知られるに至つたのは前述した、同治元年正月、辰山、天馬鎮の賊壘を平げた後、江蘇巡撫薛煥が、ウオード

の出身とその立功の次第とを述べ、これに對して賞給を行つて今後の奮勵を誓はしむべきことを云つたのによる（籌辦夷務始末同治朝四、同治元年正月庚戌薛煥上奏）ウオードの軍が常勝軍と呼ばれるに至つたのも、楊坊とこの部隊との關係が中央に明らかにせられたのも、實にこの頃のことである。籌辦夷務始末同治朝四同治元年二月己巳條の薛煥の上奏に

臣、洋槍兵勇（洋式銃をもてるウオードの部隊のこと）が甚だ成功をなし、名を常勝軍と取るにより、蘇松太道吳煦に割飭して督帶せしめ、記名道楊坊をして華爾と會同して管帶せしむ。

といふ。常勝軍といふ名稱は、現地に於いて生れたもので、上諭によつて賜つたといふ説はあたらない。楊坊は、ウオード部隊に對し、兵費の支辨をひきうけたであらうことは想像に難くないのであるが、この關係はこゝに於いて初めて公にせられた。江蘇巡撫薛煥の任命により、蘇松太道吳煦が上つてあつてこれを監督統率し、その下で楊坊とウオードとが會同して統率に當るといふ。中央が常勝軍の存在を認める以上、かく體制をととのへるべき必要があつた譯であるが、こゝ

にウオード軍編成の特殊事情が巧みに織り込まれてゐるのを見るであらう。當時、常勝軍は一千二百名、それを右の勝利の功によつて、更に増募さし支へなしといふことになつたのだが、楊坊はこれに對して如何にして兵費を賄つてゐたか、これは調査を要する問題である。

李文忠公朋僚函稿一「復會沉浦方伯」（同治元年七月初八日）に「華君口糧。吳、楊二道從關稅攫取。分毫不欠」といふ。江海關を管理する蘇松太道吳煦が關係してゐることであるからウオード軍の兵費を關稅よりとつたことは先づ當然のことと思はれるが、そればかりではなかつた様である。同治四年九月己巳李鴻章の上奏によると、常勝軍の兵費は外國より軍火銃砲を購入した費用、及び英・佛兵官が洋槍砲隊を教練した賃銀、口糧などとともに、江海關稅、釐金稅及び上海紳富の寄附によつて支辨せし旨が記されてゐる（籌辦夷務始末同治朝三五）楊坊は、右の關稅、釐金稅のほか、上海支那商人より寄附金を集めることにも腕を振つたのであらう。

李鴻章が署理江蘇巡撫となつて、通商大臣に轉じた

巡撫薛煥に代つて江蘇の回復に著手したのは同治元年四月。以後李は、常勝軍をして麾下淮軍と協力して戰鬪に當らしめたのであるが、彼は、兎角吳煦、楊坊等を、常勝軍を以てて官軍を輕視するといふ風のあるのを好まなかつた。李文忠公朋僚函稿には「吳公挾華公自重。欲其取功名。以震耀中外。以形官軍之短」(卷一「復曾沅浦方伯」同治元年七月初八日)といひ、「吳曉帆、楊坊所特止有此人(華爾)」(卷二「上曾相」同治元年八月十五日)などに見える。兩人のうち特に楊坊はウォードが中華に歸化せるに際し、自らの一女 Chang-Bei をこれに娶せるといふ珍しい行爲を敢てした、この一事によつても、如何に彼がウォードを信賴し、常勝軍を支持してゐたかが窺はれるのである。(Morse, *ibid.* Vol. I. p. 82)

五

楊坊は同治元年四月の頃、而してまだ薛煥が江蘇巡撫であつた時に、蘇松糧道に任ぜられたと見えて、籌辦夷務始末同治朝同年四月己未條に新授蘇松糧道とあり、以後、同年閏八月戊戌の條に至るまで、何れも

蘇松糧道として現れる。それが十月辛巳には前蘇松糧道となつてをり、甲午條には、丁憂蘇松糧道となつてゐるから、恐らく閏八月戊戌から十月辛巳の間に實官を去つたものと考へられる。而してその位は二品に至つた(籌辦夷務始末同治朝一二同治元年十二月辛巳條、李文忠公全書二白齊文滋事撤換片)。籌辦夷務始末には、一度、前蘇松太道楊坊(同治朝一〇同治元年十二月)とあるが、これは誤りであらう。

同治上海縣志二三游富傳には「同治元年。簡放常鎮通海道。尋丁憂未赴」といひ、光緒鄞縣志四四もこれを襲つてゐる。蘇松糧道への任命と時間的にどういふ様になるか、蘇松糧道をやめてから常鎮通海道となつたものかどうか判らなう。

同治元年八月、ウォードが慈谿に於いて戰死したことに、今後何人に常勝軍を統率せしむべきかと問題となつた。この時、英・佛ともに自國武官をしてこれを統率せしめんとする意向を示したのであるが、同治帝は慎重を期し、薛煥、新たに江蘇巡撫を實授せられた李鴻章及び浙江巡撫左宗棠に命じて籌商せしめた結果、李鴻章の意見に従ひ、英國提督ホープの推薦せる

ウオードの副官バージェヴィンをしてこれを引繼統率せしめることに決定した。而してこの際、從來常勝軍と關係の深い吳煦をして會同統率せしめ、吳煦の責任に於いてその成績を監督せしめることとなり、また巡撫である李鴻章の調度に從ふべきことが定められたのである（籌辦夷務始末同治朝九同治元年閏八月、戊戌上諭、一〇同治元年九月戊午李鴻章上奏等）ウオードの時代には、江蘇巡撫薛煥の任命により、蘇松太道吳煦がこれが統率の監督に任じ、楊坊とウオードとが會同して統率に當ることになつてゐたことは前述の如くである。この際巡撫と常勝軍との關係は形式的であつた。しかるに、今回の改正により、常勝軍は江蘇巡撫李鴻章の指揮下に入つたわけであつて、吳煦、楊坊と常勝軍との關係、中でも楊坊と常勝軍との關係は、大に趣を異にする。この定めによれば、楊坊はこれより表面に立たなくなるわけで、常勝軍から民間的な色彩が薄らぐことになる。吳煦、楊坊が、ウオード軍によつて重きをなしてゐるといふ實狀に不滿を感じてゐたらしい李鴻章は、この改革によつて江蘇巡撫たる自己の權力を擴大することに成功したのであつた。しかし

楊坊が常勝軍から手をひいたといふのでは決してない。彼は依然常勝軍に對する軍費の支辨に當り、また人事にも關係してゐた。李文忠公朋僚函稿二「上會相」（同治元年九月二十九日）に

此軍（常勝軍）用人發餉。皆楊一手經理。能左右之。吳、白（白齊文即ちバージェヴィン）。惟楊坊是聽。

と見える。李鴻章は、九月十三日會國藩に宛て、己むを得ずして吳煦に常勝軍の督帶を命じたが、吳が常勝軍と楊坊との從來の關係を説き、楊坊をして常勝軍に對する軍費支辨を任すべきことをいふので、しばらく、これに任せた旨を述べてゐる（李文忠公朋僚函稿二）彼としては、これも己むを得ざる處置であつた、と云つてゐる譯である。バージェヴィンが引繼統率した當時、寧波分遣隊を除き、松江に残つてゐる本隊員の數は四千五百餘名といふ（籌辦夷務始末同治朝九同治元年閏八月戊戌）實際問題としては、これだけの兵員に對する軍費を支辨するといふ仕事は、楊坊の如く財力と政治手腕とに於いて卓越した人物に委せておいた方がどれだけ便利であつたか判らない。

しかし楊坊とウオードとは、特殊な關係に在つた。

バージェヴィンと楊坊とが、ウオードと楊坊との關係ほど緊密にゆくといふことは、なか／＼望むべくもなかつた。兩者の間には、意志の疎通を缺くといふことも少くなかつた様であつて、結局それが楊坊に禍した。楊坊が騒いだのは、バージェヴィンの暴行事件によつてである。同治元年九月、バージェヴィンは嘉定回復後、青浦、南翔を犯した太平軍を、李鴻章及びその麾下の將軍程學啓軍とともに黃渡、白鶴港に破つて武功を著したが、この時、曾國藩は李鴻章に向つて、南京に集結せる太平軍の援軍に對し、青浦に駐屯せる程學啓の一軍を赴援せしむべきことを求めた。李鴻章は程學啓を手離しては當面の戦局に支障を來たすといふ理由から、常勝軍を派遣應援せしめることにした。これは、李鴻章の常勝軍に對する感情を現す。李は、署藩司蘇松太道吳煦と前蘇松糧道楊坊を派遣し、バージェヴィンを監督引率して急速に準備を整へ、南京に往つて協力應援せんことを命じた（籌辦夷務始末同治朝一〇同治元年十月辛巳上奏、上諭）。吳煦等の率ゐる先頭隊は十月二十九日鎮江に至つたがバージェヴィン

はこの命令に不満を抱き、病に託して行かず、そのため吳煦は十一月十四日上海にひき返さざるを得なかつた。バージェヴィンは勝手に期を延して約束を實行せず、屢々催促するも應じない、九月以前の餉銀はすでに支給済で、十月分は出發の期日が定つたならば直ちに支給せんことを約した。しかるに、バージェヴィンは、たゞに時期を定めざるのみならず、今度は南京赴援を希望しないといひ、派遣命令を辭退せんことを請うた。楊坊が責めるに大義を以てすれば、バージェヴィンは佛然として松江に回り十五日巳刻（午前十時）洋槍隊數十人を率ゐて上海なる楊坊の寓中（即ち泰記銀行）に至り、楊坊の鼻額胸臆を打傷し、兵費に充てんとして準備してゐた洋銀四萬兩を劫去するといふ暴舉を敢てした。バージェヴィンもこの事件によつて罷免せられたのであるが、吳煦、楊坊の兩人も、監督の責を全うする能はず、との理由で革職せられることゝなつたのである。（籌辦夷務始末同治朝一二同治元年十二月辛巳李鴻章上奏）こゝに於いて楊坊と常勝軍との關係は絶ち切られた。吳煦によつても同様であつたと思はれる。常勝軍との關係を以て重きをなしてゐた兩人

の地位はこの點に關する限り動搖を免れ得なかつた。吳・楊が常勝軍を擁して官兵何ものぞといふ様な態度を執るのを快しとしなかつたと思はれる李鴻章は、この事件によつて兩人の勢力を拂拭し得たことにもなる譯で、以後常勝軍の問題は直接李鴻章と外國官憲との間の問題となつたのである。

以上楊坊と常勝軍との關係を述べた。彼自身、常勝軍經理に注いだ財力も少くはなかつたと思はれるけれども、常勝軍を擁することが、經濟界に於ける彼の信望をどれだけ裏づけたかは想像に難くないのである。而して、彼はたゞの銀行家ではない。複雑怪奇な當時の國際經濟界に在つてあらゆる致富の機會を見遁さないといふ手腕をもつた人物であつた。李鴻章は、革職後の楊坊について、

楊坊坐擁厚貲。不行善事。非仁聲仁言所可感動。

弟則終歲不謀一面。自革斥後更覲然以洋行市儈自居。(李文忠公朋僚函稿三「復左季高中丞」同治二年三月初十日)

と苦々しげに云つてゐる。また、咸豐十年蘇・常陷落以來、避難民の殺到による上海地價の暴騰や同治元年

夏、浙江飢饉による米價の暴騰といふ様な周知の如き變動に處しても、巧みに立廻つたものであらう。李鴻章も流石に眼が高い。楊坊に對して京米十萬石の寄附徴達を申しつけたのは、同治元年のことと見られる。

更に浙江巡撫左宗棠は浙江の窮乏救済の目的を以て浙江在籍の富紳たる楊坊等に米の徴達を命じた。左文襄公全集恪靖奏稿初編七「滙陳浙省殘黎困敝情形片」(同治二年二月初四日)に

查有籍隸浙江之富紳楊坊、俞斌、毛象賢等十數員。身擁厚貲。坐視邦族奇荒。並無拯卹之意。且乘機賤置產業以自肥者。爲富不仁。莫此爲甚。見飭速措巨款。廣購米石運回辦賑。以濟貼危。而昭任卹之誼。理合將地方實在困敝情形附片陳明。伏乞皇上聖鑒訓示。謹奏。

とあり、右上奏の如く楊坊等をして實行せしむべき旨仰せ出されたことが、見えてゐる。その結果、左宗棠は、楊坊に對して米五萬石の寄進を申付くべく、寧紹臺道史致諤の手許より候補知縣王晉玉を上海に派遣して催促せしめたが、楊坊は言を左右にして應ぜず、結局、楊坊は、銀一萬兩の寄附を申込み、その一萬兩も

京米徴達用に充てたものを融通せんと云つたので、左宗棠は同治二年六月十日その由を上奏して同治帝の勅裁を仰いでゐる（左文襄公全集恪奏稿初編九、請將已革道員勒追京米捐款再行捐輸賑米片）。なか／＼官憲に屈しない彼の不屈な面魂がはうふつされるではないか。更にその翌同治三年には、海塘修理に際して寄附申付けられこれには三萬兩を出してその工事の監督に當つたことが光緒鄞縣志に見えてゐる。

楊坊の歿年は、光緒鄞縣志によると、同治四年といひ、モースも1865年だと云つて、これに符合する（The International Relations of the Chinese Empire, Vol. I, p. 81）同治上海縣志二三の游寓傳によると、

性好施。輔元、育嬰兩堂皆有資助。又於虹口創四明公所及義園。周恤甬人之避兵來滬者。

と云つて李鴻章や左宗棠の見た楊坊とは大分人柄が違ふ様である。官憲から見れば煮ても焼いても喰へない代物が、随分の義人であつたりする實例は、少くない。官の取立に對して、如何かにして私財を護るかは、蓄財家の苦心の存する所であるわけだ。

楊坊を好く書いてゐるのは、右の同治上海縣志だけ

ではない。光緒鄞縣志もこれに劣らない。これには特殊な事情がある。同書楊坊傳に、

遺命。出私財修鄞縣志。屬其姻陳政鑰主之。

といひ、同書知縣事載枚の序文にも、縣人張恕の序文にも、ひとしく、その事を記してゐる。賞めるのは當然と云へば當然である。今一つ、彼の功績として光緒鄞縣志の楊坊傳が傳へてゐるのは、次の一事である。

抱經樓盧氏藏書十萬卷。遭亂散佚。坊購得其什七八。立命歸盧氏無償值。甬上文獻賴以徵焉。

以上述べ終つて考へるに、彼楊坊、なか／＼、相當幅のある人物であると云はざるを得なう。

（昭和二十年三月三日）

註

- ① 同治上海縣志二三游寓傳に「楊坊字啓堂」といひ、光緒鄞縣志四四楊坊傳には「楊坊字啓堂（上海縣志）一字憩棠（舊雨草堂集墓志）」と見える。
- ② 李文忠公全集の朋僚函稿二三「復曾沅帥」（同治元年九月十二日）に、吳曉帆（吳煦の字）とならべて「楊憩堂坊」と見える。
- ③ （白齊文）以功大酬薄。頗生失望。遂刳秦記餉銀。并斫傷事主候補道楊坊。……
- ④ この日時については矢野仁一博士「近代支那史」四〇五

—六頁による。

- ⑤ 會防公所(會防局)置廢の顛末は、李文忠公全書奏稿九上海裁撤會防局摺に詳しい。局務を主つたのは、前蘇州府知府吳雲、候補直隸州知府應寶時、刑部郎中潘曾瑋、前湖北鹽道顧文彬の四人であつた(平定粵寇紀略一二)
- ⑥ 光緒卅縣志四四楊坊傳には墓志を引いて「薛煥名之曰常勝軍」として、薛煥が名付親だといつてゐるが、或は然らんでゐる。

〔追記〕

楊坊の娘でウォードの妻になつた Chang-mei のことについては詳しくことは判らなうが、In the days of the Taipings によると、彼女は一度或る青年と婚約したが、その青年が死んだので二十一歳になるまで結婚しないでゐた。そして不思議なことに纏足してゐなかつた。ウォードが彼女と結婚したのは、アメリカの國籍を離脱して中國の將軍として立つにはやはり中國人と結婚した方がよろしからう、と云ふタキーのすゝめに従つたものであると云ふ(P. 256—8) ウォードが同治元年九月慈谿に於いて戦死した時、次の様な遺言を残した。自分は上海道臺に十一萬兩、タキーに三萬兩の債權をもつてゐる、この十四萬兩のうち

五萬兩を妻の Chang-mei に、残り全部を自分の弟妹の間に分ける様に、そしてサー・ジェームス・ホープ(Sir James Hope)とバーリンゲーム(Burlingame)氏とに指定遺言執行人になつてほしい、と。つまり彼は常勝軍を率ゐて都城を占領した場合の懸賞金と、その都城に於ける掠奪とによつて得た彼の全財産を、すべて上海道臺とタキーとに委託してあり、その他には刀劍一口しか残さなかつたといふ。支那官憲はウォードの要求を承認したが資金不足の故を以て四十年間支拂はれなかつた。1896年(光緒二十二年)李鴻章はウォードの妹に、自分がこの事件に關係することを約束し、結局1901年(光緒二十七年)十八萬ドル(合衆國の通貨)が、團匪の賠償金に含められて全額支拂はれた(Morse, The International Relations of Chinese Empire, Vol. II P. P. 81—82) 四十年間も支拂はれなかつたのは、或はウォードの妻の Chang-mei は遺産を受取らなうで失つたかも知れなう。